

「へエ……實は風呂で田中屋の御番頭に逢ひまして、今晚宅で且さんの謠の温習がおますのや、御迷惑やろが二三番聽て歸つたげとくなはれと頼まれてまして。へエ。あんまり無情ふお斷り云ふのも悪いと思ふたものだすさかい……………」

「ア、謠を聞てなはつたのか……………イヤそれは良え事をしてお在なはつた。……………實はなア私は昨夜どう云ふ物か寢附きが惡ふて、夜通しオチ／＼よう寢まへなんだのや。處で貴方の出なはつたのは知つてるが、根から歸んなはつた様子が無い。はアてナ。何ない仕なはつたんやろと思ひ乍らツイうつく／＼としてたんや。するちうと、恰度三時も餘ッ程過ぎたと思ふ時分に、俣がガラ／＼走て來る音がするや無いか、この夜更けに妙な事やなアと思ひ乍ら聽てると、半丁程先でピタツと停つたで。世間が森としたアる物やさかい何でも能ふ聽えるのや。若い女はんの聲で、どふぞお近い内に……………ちウたら。シートと、何や猫追ふ様に云ふてなはる。ハテナ。一體何の事やろと思ふてると、暫くして宅の表の戸を、雨垂れ見たいな小さい音でコン／＼。コン／＼と叩くや無いか、誰ぞ言ひ附けられてよつたのやろ。表戸をソーツと開けて、へエお歸りちウと、又シートと猫追ふて、大きに憚りさんと云ふてなはつた聲に、私しや確かに聞き覚えがおますね……………」

「ヤ恐れ入りました。其處まで御存じなら仕様がムリまへん。實は謠の濟むだあとで田中屋の御番頭が、豪い御退屈でおましたやろ、鳥渡口直しに交際ふとくなはれと、八釜しふ勧められました、……」

へエ。エへ、チヨツと其、南地へ……………」

「はーん。イヤ夜晩ふから、なんちてな所へなんちに往きなはつたんや。」

「恐れ入ます。……………ホンの暫く、ワーツと云ひに……………」

「へーん。ワ一位の事は宅で云へまへんか。」

「いーえナ。何でおますね、や茶へ上つて……………」

「や茶。……………や茶て何やい」

「引繰返して云ふてまんね……………お茶屋ですがナ……………」

「遠い所までお茶買ひに往きなはんねナ……………」

「いえ左様やおまへんね……………ア、難儀やナ。つまり其何でおまんね。鳥渡アツサリ騒いどいて……………あとはしようぎを買ふて……………」

「腰掛けるのかい」

「いんえ。早ふ言ふたら姫買ひ……………」

「八釜しいツ。」

「へツ。」

「貴方私を何と思ふてなはる。何ぼ私にが突念參でも、人さんから聞いてそれ位の事は知てますわ